岐阜経済大学論集 28 巻 4 号（1995 年）

Emma 試 論

── Charlotte Brontë の *Emma* に視点をあてて ──

松 原 典 子

1.

Emma と聞けば，作者は Jane Austen と思うのが一般的であるが，今回，取り上げるのは Charlotte Brontë の *Emma* である。

Charlotte にそのような作品が存在するのかと，不思議に思われるかもしれない。*Jane Eyre* を筆頭に *Shirley*, *Villette* と *The Professor* の 4 作品が挙げられるが，いったい Emma とは何なのか。

Emma は 1853 年 11 月頃から書き始められ，鉛筆書きのまま推敲されることもなく絶筆となった。Elizabeth Gaskell のはからいと，当時 *Cornhill Magazine* の編集に携わっていた George Smith の努力により，Charlotte の死後 5 年たった 1860 年 4 月に *Cornhill Magazine* に掲載され，'The Last Sketch' と題する W. M. Thackeray の序文（追悼文）が付けられた。Mrs. Gaskell は *The Life of Charlotte Brontë* を発表し，Mr. Smith は Charlotte の全作品にかかわった Smith Elder 社の社主であった。また，Thackeray は Charlotte を London 社交界に紹介した一人であった。*Emma* は，Charlotte に関係した人々の努力によって公けにされたのである。

では，プロットも明確でない断片の *Emma* をなぜ本稿で論じようとす

るのか。それは，Jane Austen の *Emma* と同じ題名を取っているからである。Charlotte は偶然，同じ題名にしたのか，それとも意図する所があってのことだったのか。

2.

Charlotte Brontë が Jane Austen をどのように見ていたか，彼女の残した手紙を中心に追っていくことにする。

Charlotte の代表作 *Jane Eyre* は，出版と同時に一大センセーションを起こした。Victoria 朝の因習にとらわれていた世間は，俗物気取りを好み，Jane Eyre の赤裸々な魂の告白は，極めてショッキングなものであった。しかし，Victoria 女王が愛読書とし，各居城に *Jane Eyre* を置いていたことからもわかるように，この作品はその年のベスト・セラーとなった。読者はもちろん，多くの批評家たちも *Jane Eyre* を自伝として認めていたため，真実さや苦悩する姿を当然のものと判断し，彼女の魂の叫びをも，おおむね受け入れた。しかし，次のような辛口の批評もあった。

> Reality—deep, significant reality—is the great characteristic of the book. It is an autobiography, —not, perhaps, in the nacked facts and circumstances, but in the actual suffering and experience. . . . There are some defects in it—defects which the excellence of the rest only brings into stronger relief. There is, indeed, too much melodrama and improbability . . . To her we emphatically say, Persevere; deep reality distinctly before you, and paint it as accurately as you can, invention will never equal the effect of truth.[1)]

Charlotte は，G. H. Lewes のこの批評が発表される以前から，出版社の W. S. Williams を通じて，Lewes から同様の警告を受けていたことが，

'You worn me to beware of melodrama, and exhort me do adhere to the real.'[2] からわかる。度重なる Lewes の言葉に，Charlotte は 'Mr. Lewes is very lenient.'[3] と，彼の忠告に従う姿勢も示している。ところで，Charlotte が出版関係以外の人間で，生涯にわたって文学論を戦わしたのは Lewes 一人であった。その Lewes の批評の根底には，客観性と合理性を備え持った Austen の存在があった。Austen は真の意味で女流作家の先駆者である。そのため Charlotte は，Lewes の助言に従い，次作は 'I will have nothing of what you call "melodrama".'[4] という確固たる方針を示す一方で，彼の助言通りでは自分らしい，自己の内的感情と精神の希求を描く作品の完成は期待できないことも承知していた。

> I will endeavour to follow the counsel which shine out of Miss Austen's 'mild eyes,' 'to finish more and be more subdued; but neither am I sure of that.'[5]

また，'Why do you like Miss Austen so very much? I am puzzled on that point?'[6] という Charlotte の疑問があからさまに示され，Lewes の真意を知ろうとする意図もはっきりと示されている。

ところで，Lewes の強い勧めで *Pride and Prejudice* を読んだ Charlotte が，作品中に見出したものは，次に掲げるものである。

> An accurate daguerreotyped portrait of a commonplace face; a careful fenced, highly cultivated gardens, with neat borders, and delicate flowers; but no glance of a bright, vivid physiognomy, no open country, no fresh air, no blue hill, no bonny beck.[7]

これは，2年後 *Emma* を読んだ時に Charlotte が見た Austen の世界とほぼ同一のものである。それに関しては，また後で述べることにする。上述

した Austen の世界を，Charlotte は 'I should live with her ladies and gentlemen, in their elegant but confined houses.'[8] と明言し，'Miss Austen is only shrewd and observant.'[9] と，お行儀のいい分別を尊ぶ Austen の姿勢を手厳しく批判している。同時に，Lewes に対して彼の忠告に臆することなく，自己の世界の確立に新たな決意を示している。

そして次に示す手紙では，Charlotte は自身の確固たる小説論を展開している。彼女の信念と対極的な位置に Austen の存在があると理解できる。

> You say I must familiarize my mind with the fact that 'Miss Austen is not a poetess, has no "sentiment"' (Your scornfully enclose the word in inverted commas), 'no eloquence, none of the ravishing enthusiasm of poetry'; and then add, 'I *must* learn to acknowledge her as *one of the greatest artists, of the greatest painters of human character,* and one of the writers with the nicest sense of means to an end that ever lived.' . . . The last point only will I ever acknowledge. Can there be a great artist without poetry? . . . Miss Austen being, as you say, without 'sentiment,' without *'poetry,'* may be is sensible, real (more *real* than *true*), but she cannot be great.[10]

Austen には「詩」がない。「詩」のない小説は真の文学ではなく，偉大な芸術は必ず根底に「詩」がなければならない，という Charlotte の強い信念が表出されている。彼女の作品の特徴は，「詩」にあることはよく知られた事実である。彼女の自己内面への追求は，散文の領域を越えて，「詩」の領域に踏み入っている。「詩」こそ，人間の無限の生命への広がりに通じ，人生の喜怒哀楽それぞれの極限も，全てこの中に入る。Charlotte の胸中に激しく燃える情熱が，彼女の作品に生きる最大の芸術性である。この特性は，Charlotte 以前の小説の世界には，存在しなかったのである。つまり Charlotte は Austen の感知しなかった世界に生きているわけである。

> Not to mention other names, surely no man has surpassed Miss Austen as a delineator of common life? Her range, to be sure, is limited; but her art is perfect. She does not touch those profounder and more impassioned chords which vibrate to the hearts core—never ascends to its grand or heroic movements, nor descends to its deeper throes and agonies; but in all she attempts she is uniformly and completely successful.[11)]

このように Lewes は，Charlotte と対照的な Austen を賛美し続ける。なぜ彼はこれほどまでに，Austen を模範とするよう言及するのか。それは，彼の 'Currer Bell is the pseudonym of a woman'[12)] から判断できる。Victoria 朝の因習から脱却できずにいた当時の風潮にあっては，前述した Charlotte の文学的特質は，女性の言論としては認められない範囲のものであった。「家庭小説」に相当する Austen の文学的特質こそ，当時の女性のモラルに合致したものであった。実際，Charlotte の文学的特質は，20 世紀に入って，小説が広く一般に女性や子供に読まれるべきだという考えに変化し，詩と同様に作家の高揚した精神や，詩におけるよりも広範囲に人生観を自由に語る媒体であると意識された時点で認められたものである。つまり，Charlotte はそれよりも 50 年以上前に，自己の文学論を追求したことで，Victoria 朝末期において，一般大衆，また批評家にも素直には受け入れられなかったのも当然である。逆に考えれば，次の Lewes による芸術の定義は納得できる部分も多い。

> Art, in short, deals with the broad principles of human natures, not with idiosyncrasies: and, although it requires are experience of life both comprehensive and profound, . . .[13)]

これは，*Shirley* が *Jane Eyre* より劣る作品であると辛辣な批判の後に，同誌に示された Lewes の小説論である。皮肉にも，Charlotte は Lewes

の ‘melodrama’ に陥らないように，‘reality’ に基づいて書くようにという忠告を守ったのであるが，彼の忠告よりも Charlotte のロマンス作家としての力量が勝ってしまい，主題が明白でない失敗作となってしまった。しかし，その次の *Villette* では，モラルの点で賛否両論あった一方で，Lewes は ‘Villette has few claims.’[14] と絶賛している。*Villette* も Charlotte 独特の先生と生徒との関係を自伝的に描写したもので，孤独な魂の叫びが胸を打つ ‘melodrama’ の要素の多い作品である。Lewes の賛美の声に Charlotte はどんな心境だったろう。その頃すでに Lewes は George Eliot と同棲中であった。その事実が Lewes のそれまでの批評に何らかの変化を及ぼしたのであろう。Eliot も，「私はやっと身の回りの現実の意識に戻ったばかりです。『ヴィレット』を読んでいたのです。これは『ジェーン・エア』よりさらにすばらしい作品で，この迫力には何かほとんど超自然的なものがあります。」[15] と書いている。

Villette に至るまで，Lewes は自分の忠告通りの作品を完成できずにいる Charlotte に，Austen 以外に Carlyle や Balzac など多くの作家や作品を紹介[16]し，読むよう諭している。Charlotte を批判しても，Lewes なりに才能ある彼女に，Victoria 朝文学とその因習的世界を打破する担い手として期待する面があったと判断できる。

一方，Charlotte はいかなる批判に対しても，自らの信念のもと，目に見えない無限の世界を求め続ける。結局，Charlotte は道義を説いたり，思想や主義主張を並べるタイプの作家でなかったために，自分の世界の中で生き続けることができた。人見知りの激しい Charlotte が，手紙を媒体として自己の主張を明確に，しかも相手の意見に左右されずに自己の世界を見つめていたことは驚くにあたいする。

Emily の死後，Charlotte は初めて Smith 家で Lewes に会った。

I would not feel otherwise to him than half sadly, half tenderly—a

queer word that last, but I use it because the aspect of Lewes' face almost moved me to tears; it is so wonderfully like Emily, her eyes, her features, the very nose, the somewhat prominent mouth, the forehead, even, at movements, the expression, whatever Lewes does or says, I believe I cannot hate him.[17)]

Emily の生存中，彼女の才能を誰よりも認め，常に意見交換をしていた自分の姿を Lewes に重複させたのである。それ故，Austen を良しとしてきた Lewes に対し，Emily を彷彿させる姿に親近感と尊敬の念を抱き，自分の内面を暴け出していたのである。また，彼の批判を無視せず，議論を戦わせる中で自らの生きる道に一つの光明を見出していたと考えられる。

ところで，Charlotte は編集者の W. S. Williams に *Emma* の読後感について書き送っている。もちろんこの作品も Lewes の勧めからと思われる。

I have likewise read one of Miss Austen's work—Emma—read it with interest and with just the degree of admiration which Miss Austen herself would have thought sensible and suitable. Anything like warmth or enthusiasm—anything energetic, poignant, heart-felt is utterly out of place in commending these works: all such demonstration the authoress would have met with a well-bred sneer, would have calmly scorned as autré and extravagant. She does her business of delineating the surface of the lives of genteel English people curiously well. . . . 'She ruffles her reader by nothing vehement, disturbs him by nothing profound. The passions are perfectly unknown to her; she rejects even a speaking acquaintance with that stormy sisterhood. Even to the feelings she vouchsafes no more than an occasional graceful but distant recognition—too frequent converse with them would ruffle the smooth elegance of her progress. Her business is not half so much with the human heart as with the human eyes, mouth, hands, and feet. What sees keenly, speaks aptly, moves flexibly, it suits her to study; but what throbs fast and

full, though hidden, what the blood rushes through, what is the unseen seat of life and the sentient target of death—this Miss Austen ignores. She no more, with her mind's eye, beholds the heart of her race than each man, with bodily vision, sees the heart in his hearing breast. Jane Austen was a complete and most sensible lady, but a very incomplete and rather insensible woman.[18)]

Charlotte は，Austen の描写に細密画の世界を認めている一方で，人間の外面に重点を置き，人間の内面の動きを捉えていないとして，痛烈な批判を加えている。Austen の世界は，読者に情熱を感じさせるものが何もなく，Austen 自身も Charlotte と違って自己の内面を見つめることに関心を持ってはいなかった。Charlotte にとっては，技巧的に優れていることよりも，人間の燃えるような内的心情を描出することに意義があった。しかし，明快な小説論を展開した Charlotte ではあるが，自分と対極的考えの持ち主であった Austen を女流作家として，先駆者として認めていたと考えられる。認めたが故に，Austen との差異を明白にし反論もした。Charlotte にとって，Jane Austen は好敵手であった。その根本にあるものは，Austen が 18 世紀の精神思想の中で生まれ，Charlotte が Victoria 朝ロマンティックの中で生まれたこと[19)]によるものであるといえる。

3.

Jane Austen の*Emma*[20)] について簡単に述べておく。まずその概要から示してみる。

ヒロイン Emma Woodhouse は 21 歳の才色兼備の女性である。幼なくして母を亡くし，父と姉の 3 人暮らしであったが，彼女たちには Miss Taylor が 16 年間，あらゆる面で母親代わりとなって，家族同然に生活してきた。その間に姉の Isabella は John Knightley と結婚し，London に住

み，一年に数回しかもどってこない。そんな中，先日 Miss Taylor がやもめの Mr. Weston と結婚した。彼らの結婚を取り持ったのは Emma 自身だと彼女は思っていた。そして中年のこのカップルを最高と思った Emma は，自分の周囲の者にも，この幸せを味わわせたく思っていた。Emma は，出生のはっきりしない，しかし気立ての良い Emma の妹分にあたる Harriet Smith の結婚を画策する。Harriet は農夫の Robert Martin に既にプロポーズされていたが，Emma は彼が農夫であることにこだわり，Harriet にこの話をことわらせる。Emma は Harriet を村の Elton 牧師と結びつけようとするが失敗。次に Mr. Weston の息子で，亡き妻方の養子となっている Frank Churchill と結婚させようとするが再び失敗。Emma の努力は空しく終わるが，彼女が画策していた間に Harriet は George Knightley に思いを寄せていた。これを知って Emma は驚きあわてた。それは，義理の兄である Mr. Knightley こそ Emma が幼ない頃から兄として，そして今や一人の男性として愛の対象に考えていたからであった。最終的には Harriet は Robert と，Emma は Mr. Knightley とめでたく結ばれるという喜劇仕立ての物語である。

Emma は健康的で，他人を魅了する女性である。愛情深く人情味豊かなことがわざわいして，せっかく他人の結婚を取りもとうとしても失敗する。しかし彼女にとって，その行為は恋愛遊戯に走ってのことではない。この行動こそ，Emma の ‘a few clever thing’ の追求であり，失敗し失望に陥りながらも社会の本質を見極めている。丁度，Austen が人間の平凡な日常茶飯の生活の中にとどまったのと同様である。

ところで Emma 自身は Mr. Knightley に思いを寄せているが，彼は階級にとらわれることなく，完全な公平無私，また，人と人との結びつきに，人間の真実と誠実を求める人物である。そんな彼との結婚は，Emma の父娘2人の生活状況からは，Emma 自身できるはずもないと思っており，一生 Miss Woodhouse として過ごすことが天命であるという，いわば結婚

に対する彼女のマイナス思考が働き，彼の人間としての正しさに反抗の態度すら見せている。それに反比例するかのように Emma は他人に対して結婚を勧めることになる。そしてこの作品は Emma の失敗を繰り返しながらも進む結婚奨励活動を描出しているが，結婚が中心的話題であることは，他の Austen の作品と同様である。

特に *Emma* を Austen は，'melodrama' つまり恋愛小説を目的としていたわけではなかった。道徳を結婚問題に提起したものである。つまり，人生で一番重要な問題は，結婚相手としてどのような人物を選べばよいかということである。もちろんこの問題は Austen の小説全体についてもいえることである。相手を過大評価したり，あるいは過小評価したり，そのような過誤と失敗を重ねながら，男女はそれぞれにふさわしい相手を見つけ結婚する。この場合のふさわしいとは，自然な，という意味である。そして愛情と尊敬の念が自然に湧いてくる対象であり，同時に社会的身分に差のない結婚相手が最良ということである。Emma が Harriet の相手 Martin を非難するのは，彼には上述した最後のハードルを越えることができないと判断したためである。18 世紀から 19 世紀初期にかけて，結婚は女性にとって何であったのか。Austen が属した上層中産階級では，結婚は一族の血統と家柄を守り，地域社会の中で，その地位と財力を保持していく重要な役割を担っていた。つまり Emma が画策するのと同様に，幸福な結婚の第一条件は階級であった。

Emma 執筆にあたり Austen は，「私以外に誰も余り好きになれそうもない Heroine を取り上げる心づもりである。」[21] と宣言している。これからわかるように，*Emma* は Victoria 朝の一般女性の物静かで男性社会に服従するという生き方とは少々趣きを異にした，激しい調子，つまり，Austen の次元の高い世界と正しい真実を追求する精神状態が表出されている。

Austen の他の作品のヒロインも皆，魅力あふれる者ばかりである。*Pride and Prejudice* の Elizabeth，*Persuasion* の Anne，*Sense and Sensibility*

の Marianne など，どの女性も生きる上で，確固とした自己主張をしている。主体性があり知的で，自己の判断で行動でき，かといって自分の能力と本分をわきまえ礼儀正しく，そして自分の経験内で意見を述べ，物事に対処できる女性である。また，できる限り正確に他人を判断することに努力を惜しまず，万一，誤っても素直に受け入れ，人間としてさらに成長進歩をとげていく。もちろんその過程では，彼女たちの生きることに対する真摯な態度と豊かな感受性が加味していることは当然である。そして *Emma* の中では，現実生活の中で人間の生き方が追求され，人間が見えると思っていることが実際には見えていなかったと認識することが，人間の成長にとっての第一段階であり，その段階をクリアする過程で，生きる何かを把握することが，特に Emma に与えられた義務でもある。その結果，一見喜劇的とも思える生きざまは，実のところ Austen の緻密な構成と彼女自身の誠実な生き方によるものであり，人物の行動そのものがそのまま自然に物語を完成させているのである。

Chesterton は，「完璧な常識を捉えた女性は，今に至るまで現われていない。これ以後の女流作家は誰もみな，頭に何かこむずかしい理屈をつめこむことに汲々としていることに対し，彼女だけはあくまでも澄んだ頭で平静さを失なうことがなかったからである。彼女には冷静に男を描くことができた。……彼女には自分にわかっていることが，はっきりとわかっていた。健全な信仰の持主と同様である。そして彼女は自分にわからないことは，ただわからないとした。」[22] と述べている。Austen は自己への天命に従って小説を書き，読者という存在にとらわれることなく，自分のために推敲を重ねた。それが，プロ根性を持った本当の職業作家[23] といわれるゆえんである。

4.

Charlotte の結婚について少し述べておく。彼女は数人からプロポーズを受けたが，相手に対して愛と尊敬を抱くことができないことを理由に，全てに拒否をしてきた。その矢先に A. B. Nicholls から突然プロポーズを受ける。父と娘2人だけの取り残された世界と，妹たちと弟の相次ぐ死から受けた悲しみと孤独が，Nicholls の誠実さを受け入れることとなった。受けた時点で，Charlotte は Nicholls に対して愛情を持ってはいなかったであろうと推測される。その点で，Charlotte のそれまでの結婚観に何かしらの変化が見えてくる。個々の愛というより，人間が人間に対して抱く人類愛的なものが，Nicholls に対しては同情心という形で特に現われてきたのではなかろうか。しかし，たとえ同情心からの結婚であっても，Charlotte の明敏な眼は，Nicholls の優れた人間性を発見し，またアイルランドでの Nicholls 一族の地位，生き方等を知るにつれて愛と尊敬を抱くようになってきた。また，妻としての繁雑な日常生活の中で夫としての Nicholls に，確かな愛情と尊敬の念を持つに至るのである。このような妻として，さらには白内障を患いしかも老いた父の娘としての生活の中にあっても，Charlotte は作家 Charlotte Brontë の姿を埋没させてはいなかった。*The Story of Willie Ellin* と *Emma* の2つの未完の作品を残している。ある晩，Charlotte は夫に対して *Emma* の原稿を見せ叫ぶ。

> Oh! I shall alter that. I always begin two or three times before I can please myself.[24)]

しかし，この頃すでに彼女の肉体は推敲するだけの余力すら失なっていた。そしてついに *Emma* は未完のまま残された。

そこで，Charlotte の最後の断片 *Emma*[25] の概要を見てみる。

Mrs. Chalfont という中年の寡婦が語り手となって物語は展開されていく。彼女の近所の Mabel Wilcox 経営の女子寄宿学校について夫人は話し始める。Miss Wilcox には婚約者とおぼしき Mr. Ellin が彼女をたびたび訪れる。ある日，英国中部の May Park の荘園主と自称する Mr. Fitzgibbon が娘の Matilda を伴い来校する。娘の身なりもきちんと整っていたので，経営難に陥っていた Miss Wilcox は Matilda に対し特に目をかける。そのため Matilda は他の生徒と協調できず，ほとんど一人で過ごし夢遊病患者のようになり，ついに倒れる。Miss Wilcox がクリスマス休暇の過ごし方について，生徒の保護者に問いあわせたところ，Mr. Fitzgibbon への手紙だけが受取人不明で返送されてくる。Miss Wilcox から調査の依頼を受けた Mr. Ellin が May Park を訪れてみると，Fitzgibbon という人物も荘園も架空のものだと判明する。2 人で Matilda に真相を問うと，彼女は怯え青ざめ答えることができずに卒倒する。Mr. Ellin は Matilda を抱きかかえ休息させる。そして自ら Miss Wilcox に調査の継続を申し出る。ここで *Emma* の筆は断たれている。結局 Emma なるヒロインは登場しないままである。当然，*Emma* にはやはり Emma なるヒロインが存在するはずであったろうが，彼女は幻のヒロインでしかない。

物語では，Emily Brontë の *Wuthering Heights* の語り手 Nelly Dean を彷彿させる中年の未亡人 Mrs. Chalfont が，まず自己紹介をするが，簡潔でユーモアを含む語り口はむしろ Austen を思わせるものである。そして導入部分は Charlotte の作品中でも最もすばらしいものであり，その後の展開での Mr. Ellin や Miss Wilcox の性格描写には読者を引きつけるに足る Charlotte の円熟味すら備わっている。また，短い断片ではあるが，他の多くの人物描写も他の Charlotte の作品と比較しても優れたものといえる。

ところで，作家は執筆中に完成後の作品に与えられる批評をある程度予知

できるものであろう。とすれば，当然 *Emma* は Austen の *Emma* と比較対照されることは明白であり，Charlotte は Austen の *Emma* を意識して書いたものだと考えるのが自然である。

> I had a letter the other day announcing that a lady of some note, who had always determined that whenever she married her husband should be the counterpart of 'Mr. Knightley' in Miss Austen's Emma, had now changed her mind, and vowed that she would either find the puplicate of Professor Emanuel or remain for ever single.'[26)]

Charlotte が *Emma* の主人公に，Austen の *Emma* の George Knightley を凌ぐ男性の創造を決意していたと考えられる。そして孤独な Matilda に Charlotte 流の Mr. Knightley を与えようとしたのである。Austen の *Emma* における，父と家庭教師から甘やかされて育った Emma と違い，父と女校長から棄てられ孤独な Matilda を創りあげ，彼女を励まし教育し一人前の女性にする人物として Mr. Ellin を設定し，しかも彼を Mr. Knightley のような真実を見つめ誠実な主人公としたのではないだろうか。

ところで，ヒロインは誰か。若き女性で，読者を引きつける魅力を持つ者は Matilda だけである。また，教師と生徒という Charlotte の小説の基本的な登場人物にあてはめても，Matilda がヒロインであるといえる。しかし，Matilda は Emma ではない。もしかしたら，*Shirley* の Mrs. Pryor が実は Agnes Helston であったように，Emma であることが何かの事情により隠され，今は Matilda として登場しているのであろうか。あるいは，語り手である Mrs. Chalfont が Emma であり，今は Matilda なのであろうか。これらの仮説は，Mrs. Chalfont が全知の語り口をしているからであり，彼女の語りは，自身のことから Matilda Fitzgibbon の

ことへと移っているからである。とにかく，いくつかの疑問を投げかけ，読者に断片の続きを創作させたい気にしてしまうという不思議な魅力を持っている。

Brussels 留学の体験を集大成させた *Villette* 以後，Charlotte は過去から未来へと視点を変えようとしたのか。M. Hèger を予感させない新たな男性像を築こうとしたのか。Emma に Charlotte 自身の結婚と女性の生き方を昇華させ，Charlotte Brontë と訣別し Charlotte Brontë Nicholls として，新たな女性像を創り出そうと意図したのか。いくつもの解釈ができる *Emma* である。

5.

Charlotte は *The Professor* の中で次のように語っている。

> Novelists should never allow themselves to weary of the study of real life. If they observed this duty conscientiously, they would give us fewer pictures chequered with vivid contrasts of light and shade; they would seldom elevate their heroes and heroines to the heights of rapture—still seldomer sink them to the depths of despair. . . .[27)]

実人生を忠実に描き，人間精神の恍惚と絶望という両極端の域に立ち入らないことが根底となっている。しかし彼女のリアリズム絶対主義による *The Professor* は *Wuthering Heights* や *Agnes Grey* に劣るとされ，出版されることはなかった。リアリズムに徹しようとした Charlotte は失敗を糧として，ロマンティシズムを加味した *Jane Eyre* で作家の地位を不動のものとした。そして作品を追うごとに現実を超越し，人間の内面活動とその飛躍を把握し，彼女独自のリアリズム，つまり事実が彼女に意味したことを

最も感動的な方法で表現することへ成長発展し，*Villette* でみごと結実した。*Villette* では，*Jane Eyre* の 'melodrama' 性を超え，その結末ではリアリズムとロマンティシズムが結合した。このことが，Charlotte Brontë がリアリスティック・ロマンティシズムの作家[28]といわれるゆえんである。

心理写実主義の先駆者[29]といわれる Jane Austen が，冷静で分別ある人間を外部から観察したのに対し，Charlotte は人間の内部，特に自己の内なる叫びに耳を傾けることに執着した。つまり，Austen は「分別」から出発し「感情」を探り，Charlotte は「感情」から出発し「感情」をどの程度，どのように受け入れるかを模索した。結果，Charlotte は Austen の世界を否定しているが，その実は Charlotte は視点を変えていただけということができる。もし遺稿となった *Emma* に，Charlotte が Austen 流の心理描写を加味したものを完成させるつもりであったならば，自己の世界に自己の生きざまを投影させ，しかもそれまでの Charlotte とは異なり客観性をプラスすることで，*Emma* なる未完の小説は文学史上類を見ない傑作となっていたかもしれない。

Austen の *Emma* が出版された 1816 年に Charlotte は生まれた。Charlotte が *Emma* を完成させずに世を去ったという事実は，内に秘めた燃える炎のような Charlotte の夢と希望が達成されなかったことであり，ある種の思いを与えるものである。

最後に，Charlotte は Victoria 朝の枠から脱却することを願い実践したが，無意識の中ではロマン主義者であっても，意識の上では Victoria 朝人の清教徒的道徳心を持った作家であった。全ての人間にとって，*Emma* を遺して去っていった Charlotte Brontë Nicholls に安住の地を望むのみである。

〔注〕

1) G. H. Lewes, from an unsigned review, *Fraser's Magazine,* December 1847,

xxxvi 686–95 in Mirriam Allot ed., *The Brontë's: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1974) p. 84–85, 87.

2) Clement Shorter, *The Brontës: Life and Letters* (New York: Haskell House Publishers, 1969) I, p. 365. To G. H. Lewes, November 6th, 1847.

3) *Ibid.,* I, p. 372. To W. S. Williams, December 11th, 1847.

4) *Ibid.,* I, p. 386. To George Henry Lewes, Haworth, January 12th, 1848.

5) *Ibid.*

6) *Ibid.,* I, p. 387.

7) *Ibid.*

8) *Ibid.*

9) *Ibid.*

10) *Ibid.,* I, p. 388. To G. H. Lewes, January 18th, 1848.

11) G. H. Lewes, from an unsigned review, *Edinburgh Review,* January 1850, xci, 153–73, ibid., p. 162.

12) *Ibid.*

13) *Ibid.,* p. 164.

14) G. H. Lewes, "'Ruth' and 'Villette'", *Westminster Review,* April 1853, ii, 485–91, ibid., p. 211.

15) G. S. Haight ed., *The Letters of George Eliot* (Yale U. P., 1954–56) II, p. 87. 引用文は野中涼訳『ブロンテ姉妹』(冬樹社, 1978) のものである。

16) Shorter, I, p. 424; II, p. 40, 41, 174 等から判断できる。

17) Winifred Gérin, *Charlotte Brontë* (Oxford U. P., 1977) p. 430.

18) Shorter, II, p. 127–28. To W. S. Williams, April 12th, 1850.

19) Q. D. Leavis, *Fiction and the Reading Public* (Peregrine Books, 1979) p. 189.

20) Jane Austen, *Emma* (Oxford U. P., 1992) を今回, テキストとした。

21) Silvia Townsent Warner 著, Chise Ibuki 訳『英文学ハンドブック——「作家と作品」No. 12 *Jane Austen*』(研究社, 1964) p. 27.

22) G. K. Chesterton 著 *The Victorian Age in Literature*, 安西徹雄訳, G. K. チェスタトン著作集 8.『ヴィクトリア朝の英文学』(春秋社, 1979) p. 96–97.

23) 青山吉信編著『世界の女性史 7 イギリスII 英文学のヒロインたち』(評論社, 1976) p. 33.

24) Earl A. Knies, *The Art of Charlotte Brontë* (Ohio U. P., 1969) p. 220.

25) Charlotte Brontë, *The Professor and Emma A Fragment* (Everyman's Library, 1974) を今回, テキストとした。

26) Shorter, II, p. 317. To W. S. Williams. 日付なし。

27) Charlotte Brontë, *The Professor,* p. 140.

28) 山脇百合子著訳『ブロンテ姉妹』(英潮社, 1978) p. 203.

29) 野町二, 荒井良雄著『立体イギリス文学』(朝日出版, 1978) p. 50.